

まえがき

授業を上達させるために、「発問」「指示」「説明」の3つの技術をしっかりと身につけることはたいへん重要です。

授業を基本的に規定するものは、なんといっても教材ですが、教材がよければ授業が必ずうまくいくのかというと、そうではありません。どんなによい教材をあつかった授業でも、「発問」「指示」「説明」などの授業技術が不足していると、そのよさが十分に發揮されないからです。

現在の学校現場では、若い先生がたいへん多くなっています。新卒採用で、いきなり担任を持たされることも珍しくなく、たとえ新任教師であっても、即戦力としての一人前の授業レベルが求められます。学校側からも、保護者側からも、若い先生方の「早い成長」、「早い上達」が期待されているのです。

しかしながら、今日の学校現場のように、毎日忙しい状況が続くと、授業技術を高めるためにじっくりと何冊も本を読んだり、ゆっくりと先輩教師にたずねたりする時間がなかなかとれないものです。

そこで本書では、そんな読者のみなさんのために、「発問」「指示」「説明」について、すぐに取り組むことのできる基本技術ばかりを紹介しています。どの内容も、わたしが実際の授業で実践してみて、うまくいったものを選び、若い先生方にアドバイスした際にも同じ効果が得られたものを中心に構成してあります。それぞれの技術の基礎・基本をしっかりと身につけることで、授業力の「スピード上達」につながっていくことと思います。

また、第1章では、「発問」「指示」「説明」の機能やそれぞれのちがいなどについてもふれておきました。教師の話す言葉の基本的な考え方なので、ぜひ知っておいてほしいからです。

教師をしていると誰でも、「話しそぎ病」という病にかかります。わたしも、この「話しそぎ病」にかかりました。反省して話しそぎないように気をつけていても、何度もこの病にかかりました。

そのときに、なぜ何度も同じことをくり返すのだろうと考え、あるとき、その理由がわかりました。それは、教師の話す言葉である「発問」「指示」「説明」の3種類を意識的に区別して使っておらず、その場しのぎで子どもたちに話していたために、つい話しそぎてしまつたのです。

この反省を生かして、課題に対して「発問」したほうがよいのか、それとも「指示」したほうがよいのか、あるいは「説明」したほうがよいのかを考えるようになりました。その結果、「話しそぎ病」はだんだん改善していきました。

しかし、これだけでは子どもたちにわかりやすい授業をつくることはできません。「発問」「指示」「説明」には、それぞれ技術があり、それを自由に使いこなせるようにならなければならないからです。

本書をとおして、あたりまえと思われるような教師の話す言葉の基本を思い返し、とらえ直し、さらに自分の技術を加えながら、子どもたち全員を引きつけ、夢中にさせるような授業をつくりだしてもらえたなら幸いです。

最後になりましたが、本書を書くにあたっては編集部の後藤優幸さんにたいへんお世話になりました。またクノケイスケさんにはすてきなイラストを描いていただきました。ありがとうございました。

2015年7月

加藤辰雄



もくじ

クラス全員を授業に引き込む！
発問・指示・説明の技術

第1章

授業力アップへの第一歩！

発問・指示・説明の役割を知ろう

①役割のちがいを知っておこう！	10
②発問の3つの機能を使い分けよう！	12
③指示の3つの機能を使い分けよう！	14
④説明の3つの機能を使い分けよう！	16
⑤説明を発問化・指示化しよう！	18
⑥発問・指示・説明を組み合わせよう！	20
COLUMN 子どもにとって「聞きやすい声」とは？	22

第2章

子どもの思考力をゆさぶる！

発問の技術スピード上達法

①正しく伝わる長さで発問する	24
②話す速さを意識的に変える	26
③最適な立ち位置で発問する	28
④タイミングを意識する	30
⑤予告して引きつける	32
⑥一度発問したら言い換えない	34
⑦同じ発問をくり返さない	36
⑧全員参加をつくりだす	38

⑨一斉返答させて定着度をつかむ	40
⑩導入で興味・関心を刺激する	42
⑪イメージ化できる発問にする	44
⑫矛盾・対立・葛藤を生みだす	46
⑬多様な考えを引きだす	48
⑭資料を読み取らせる	50
⑮予想させて観察力を育てる	52
⑯立場を決めさせて話し合いを深める	54
⑰正答に導くための助言をプラスする	56
⑱似たようなものを比較させる	58
COLUMN 発問の意味が理解できない子には?	60

第3章

子どもをうまく動かす! 指示の技術スピード上達法

①子どもたち全員が集中するまで待つ	62
②1つの指示を短く簡潔にする	64
③活動中には新たな指示をしない	66
④一時に一事を原則とする	68
⑤スムーズに流れる順序で指示する	70
⑥指示内容を板書して示す	72
⑦イメージ化できる言葉をつかう	74
⑧動作をさせて確かめる	76
⑨納得できるように説明をプラスする	78
⑩音と指の合図を効果的に使う	80
⑪誰に対する指示か明確にする	82

⑫見通しがもてるようにする	84
⑬指示の聞き方をルール化する	86
⑭指示した後を大事にする	88
COLUMN 話す力につけるには？	90

第4章

授業がスムーズに展開する！

説明の技術スピード上達法

①興味・関心を引く内容にする	92
②内容をスリム化する	94
③長い説明は区切る	96
④必要以上に説明しない	98
⑤説明する順序を考える	100
⑥大事なところを強調する	102
⑦発問とうまくつなげる	104
⑧話し方にメリハリをつける	106
⑨説明の途中に「間」を入れる	108
⑩むずかしい内容には具体例を入れる	110
⑪実物を見せる	112
⑫板書をうまく活用する	114
⑬実演して納得させる	116
⑭子どもたちの体験と結びつける	118
⑮緊張感を生みだす方法	120
⑯状況に応じて方法を変える	122
⑰結論を先に言う	124



1

役割のちがいを 知っておこう！

教師の指導言である「発問」「指示」「説明」には、それにちがうはたらきがあります。このちがいを理解しておくことが上達への第一歩です。

◎…教師の話す言葉には3種類ある

授業において子どもたちに学習内容をわからせようとするとき、教師は話してわからせようとします。子どもたちの反応を見ながら話すのですが、その反応がよくないとさらに熱が入ります。

授業において話すことは、教師にとってあまりに日常的です。ともすると、その重要性を忘れてしまいがちになります。力を入れて話したのに、子どもたちにその内容が伝わっていないことがわかつたときに、教師の話す言葉の大しさにあらためて気づかされます。

そこで、教師の話す言葉をよく吟味してみると、「発問」「指示」「説明」の3種類があることがわかります。

◎…「発問」「指示」「説明」のちがい

では、「発問」「指示」「説明」は、それぞれどのようにちがうのでしょうか。それは、子どもたちのなにに対するはたらきかけるかがちがうのです。

このちがいについて、大西忠治氏は『発問上達法』（民衆社）で次のように述べています。

「発問」は、子どもの思考にはたらきかける「指導言」である。

「指示」は、子どもの行動にはたらきかける「指導言」である。

「説明」は、その中間である。つまり、思考にも行動にもはたらきかける「指導言」である。

例えば、理科授業で「レモンは何性ですか」と問いかけて話すと、「酸性、アルカリ性、中性のどれかな」と子どもたちの思考にはたらきかけます。

「レモンは何性か調べなさい」と話すと、子どもたちがリトマス紙で調べるという行動にはたらきかけます。

「レモンが酸性かどうかこれから調べます」と話すと、子どもの思考にも行動にもはたらきかけます。

このちがいをよく自覚して、子どもたちに話すことが大切です。

◎…学習内容に照らして使い分ける

学習課題に対して「発問」したほうがよいのか、それとも「説明」したほうがよいのか、あるいは「指示」したほうがよいのかは、学習課題の性質と照らし合わせて選ぶようにします。

学習課題について子どもたちにじっくり思考させたい場合は、発問したほうがよいでしょう。発問をうけて、子どもたちが答え、その答えをめぐって子どもたちで話し合いが行われ、なにかの結論を引きだすことができるからです。

学習課題がむずかしくて理解しにくい内容をもっている場合は、発問して子どもたちに考えさせるよりは説明したほうがよいでしょう。話し合いが深まらないものを、くどくどと話し合わせるくらいだったら、教師がわかりやすく説明したほうがよいかどうです。

そして、学習課題を子どもたちに作業させるなかで理解させたい場合は指示したほうがよいでしょう。具体物を操作したり、体験活動をしたりして理解する方がわかりやすく、学習内容が定着しやすいからです。